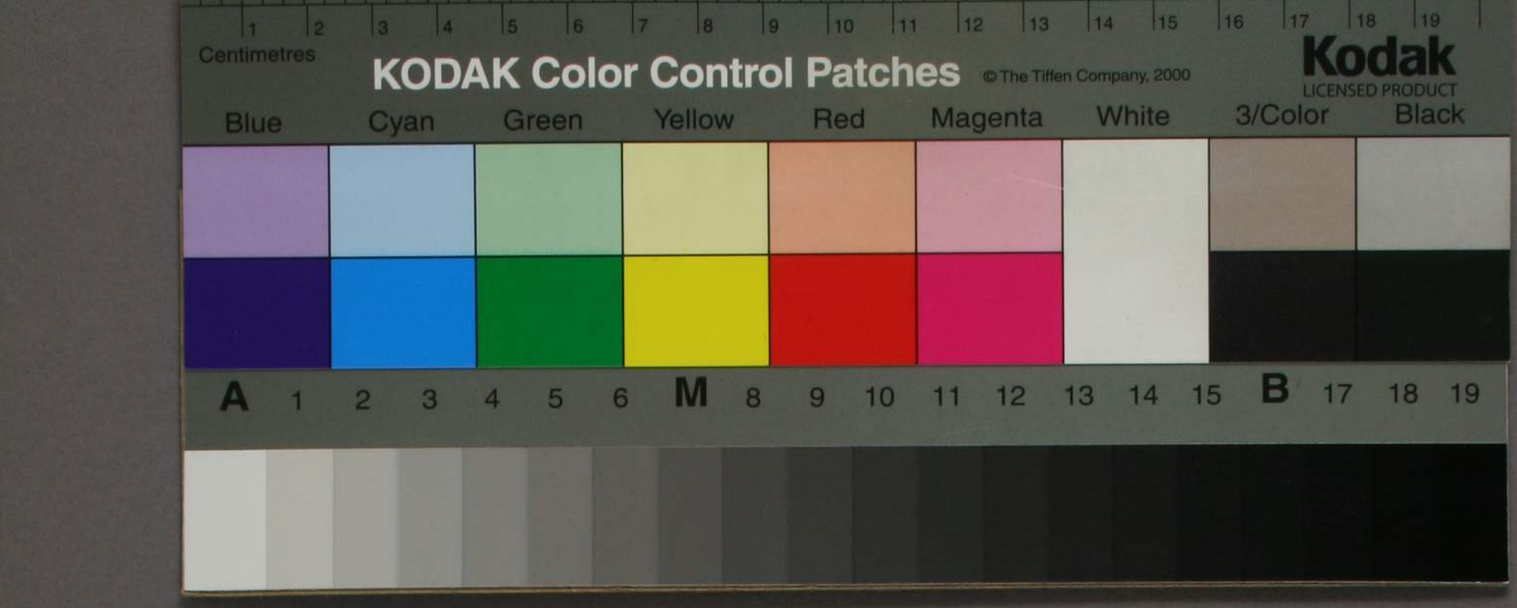
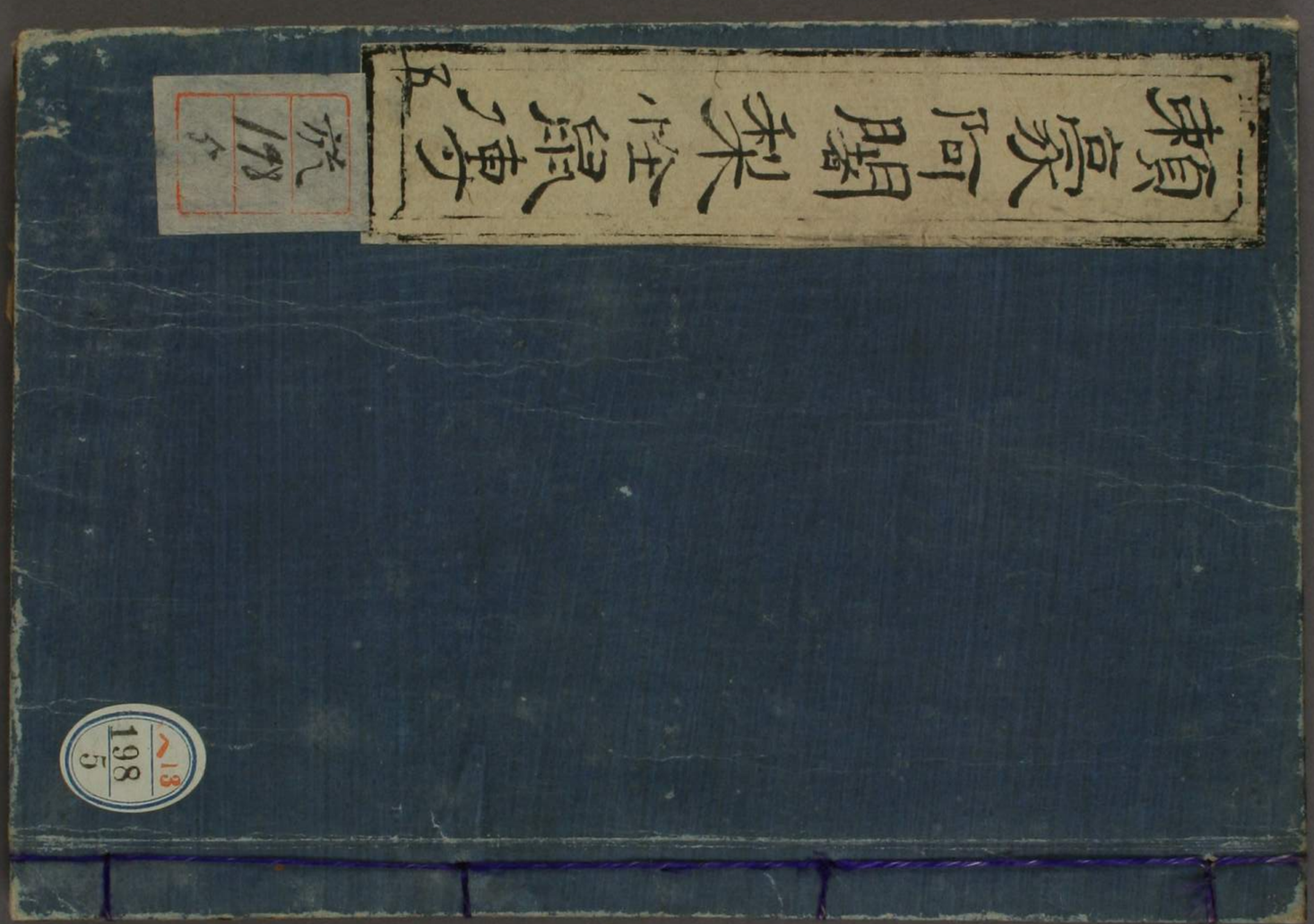

Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black


東京府下
明細
未詳
記事
198
5

0
1m
10
JAPAN
20

於198ラ

頼豪阿闍梨恠鼠傳巻之五

東都　曲亭主人著述　門人魁蕾癡叟批評

第十套

西行法師いとろ〳〵ども縁君殿より抑留られく。文武の長袴を着て。秋の日もう〳〵傾けども臭うほ酣なり。今宵ハ二五夜中の月も隈なくべし。夜とともにまかりぬべしと頼朝叮嚀よとゝめなく。とも西行ハ猶も〳〵奥州へ路うほ遥よゆゑ小うべたなりとてしきりく推辞しく。頼朝をゞなく。とゞめ石田を康高久が分捕ものゝ鎧を置られいでこれを把てく西行に

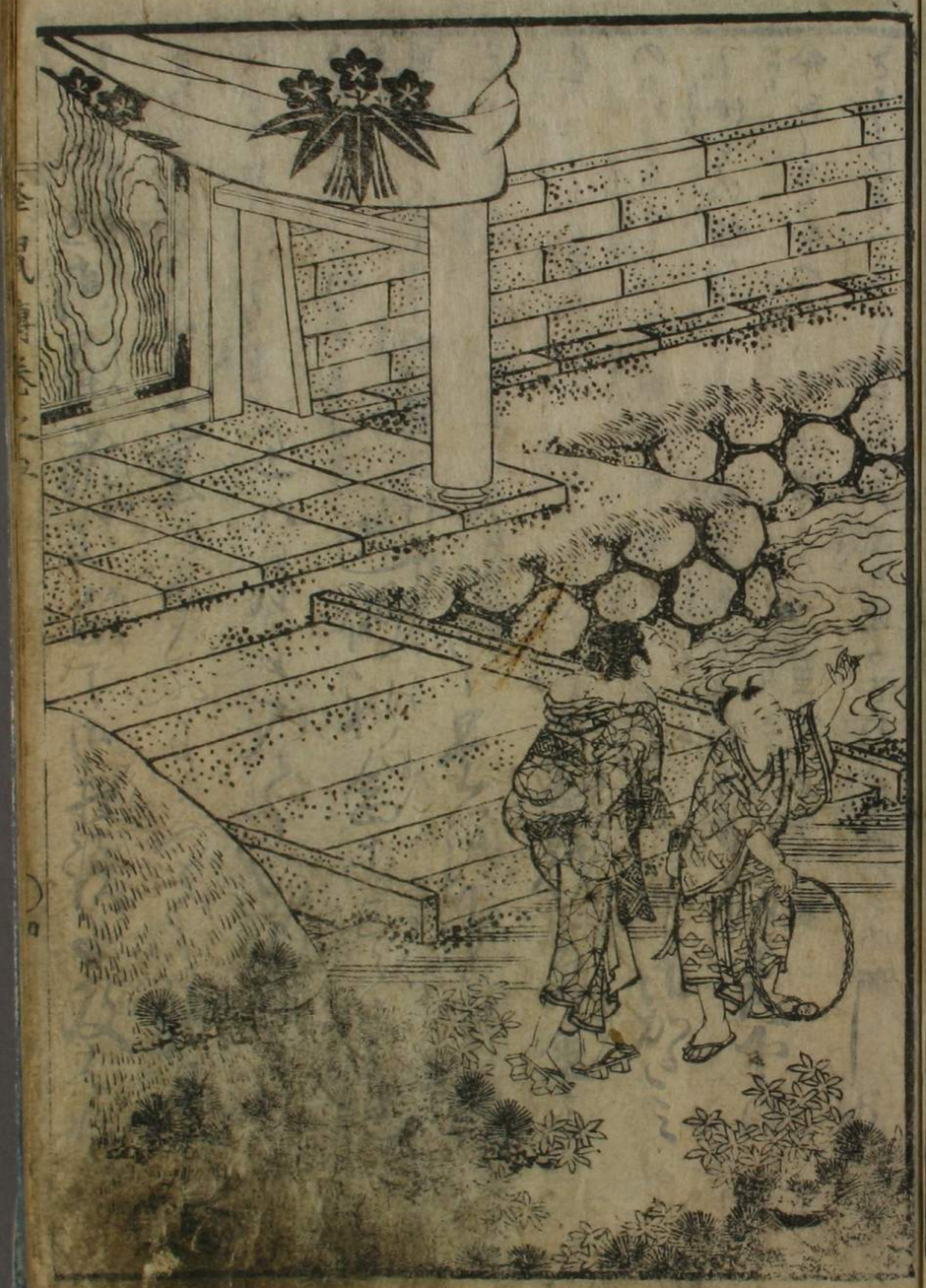
いくどもさる歎祈をせられ還幸ましまし。すべて万もその志の信ある小国なれば彼金の猫東狐以下狼の猫とえを受て。いかでか。貴僧不思議に貴呼に値遇しまつる。暫時逆徒の疾病を受るに似たり。又この布施を受る。些の報せざいあるべからず。貴呼を相をるに今宵剣難あり。深く慎あるべし。もしとかくもあらば。後うるさく記憶もあらば。後うるさく暁ばかりと密呼に説示し。さて誅出ぢる年。

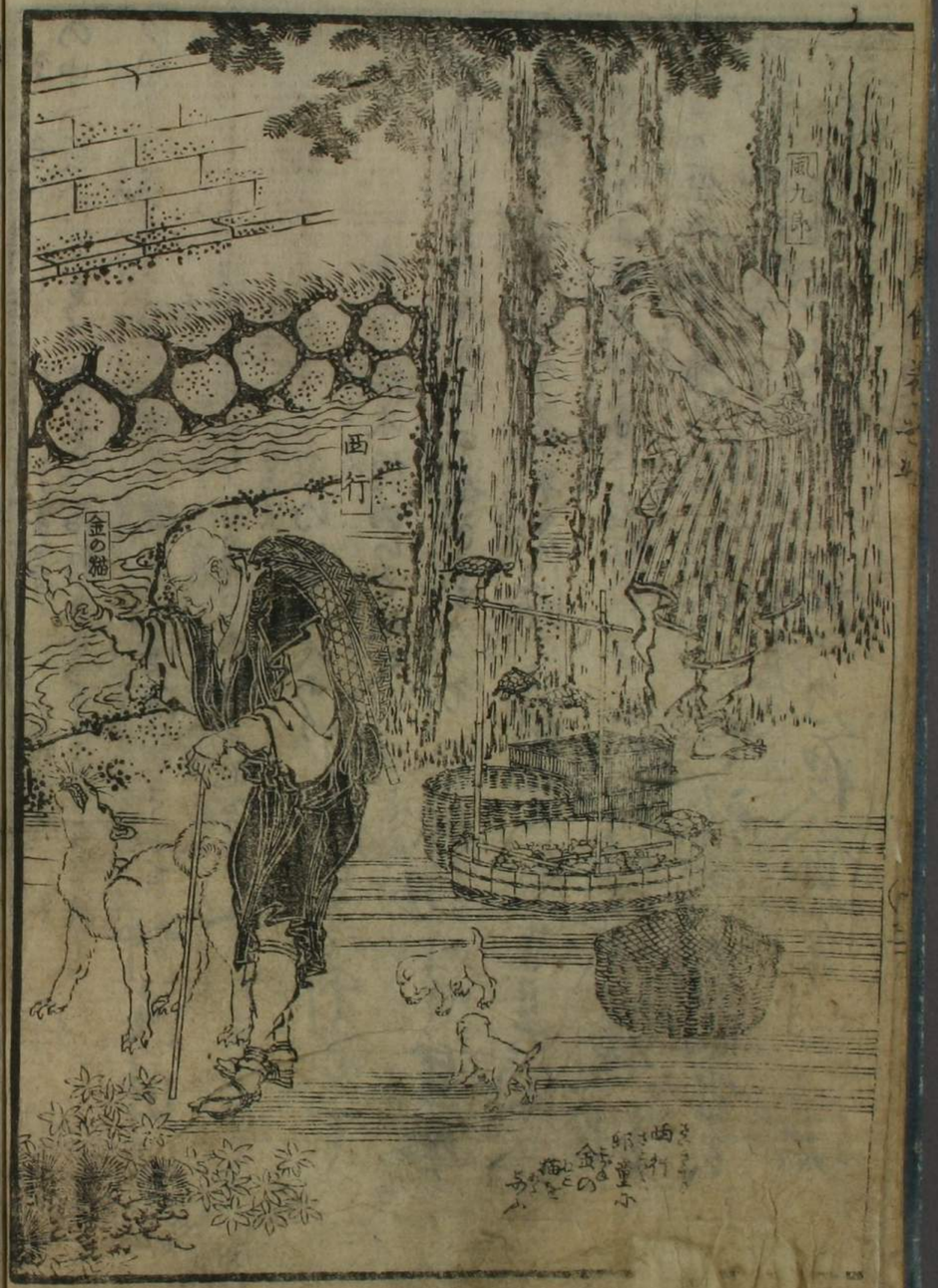
それば又左もありもやとうたがひ本曽の麻衣吟ぜる三度まで。遂に列を出。忙しく退出り。そのころ北教経八十余の老の身を考ふるに。慶明する君の。重忠も又物の数ならず。

是ぶ。行とやらんむ中穏ずれども。えも来知間ふ猶虐みて天の生せる英雄もあらむとの給ふ。終に気色も顕しあらはれ。姫と尤も覇の女房ふたを集合唐糸よ仇業琴を操持さてこの夜の月を賞しのみ大将の好る年うち。世の中を形るにぼちぼち。羅綺よも堪ぬらん容止のいとうしく細やかにて。両よ悩る姿の鳥の塒よ迷ふ風情なれど今宵の月をうえざらんや病つかれ起るよ親をも慰めのくとく。母公の強ふりのふよな白整帰しうんいしこと。ぼちぼち侍児ふよ押並病を推しくる。その席よつろうりゆーりよ。下和田秩父なんど在鎌倉のぶよ。その内室をもくのと愛たる孟臺をありしくよ進ろせる。親父重忠の内

室嫩子のいぐさまの怜悧のさうぞ。
牧羽の重右が今よ回報をそうさぐ
同んとそろ北條和田以下の門室よ
とろ。小夜深るそぐ女房逸ろともよぶ名んじのお胃腑をと
ら一つ或ハ又四表八表の物ぐろうさ
西行法師ハ申のか魁よ及びて。営中をまろ立今宵ハ金澤をとと
く忙しく立ろうと。これハ道の次よ年八つ九つ
する亀のまの中を。索ろく楚と結ん。小石砂のうくともろどころら
ぐろろりと引揚ろ。そのとおお祝いたぐ立在く呼とめなどもよ。そ
の亀を放ぜられの代よ。これのとろちんそともあへぞ法衣の袖
ろり金の猫をとろ。やーく立ちする件の童大よ放び亀をぶ直よ溝渠

の中へ投捨てまろ未まだ両刻ろこもあれば。
りひろぐろ後さまろ金の猫を遍ちく。金澤をさく立ろ。
りひもろ立ぞとられ初ろ。ところ喜しく。紬よ抱ろく着宮小路を南へ濱辺
を直よ走りゆくおしも忽ち後よ人ありてたり。その折
拾。身よハ渋染の上絽木綿のひと短死単衣を被ろ頭よ笠管のありたる
笠を載まろ白布の甲懸をろく。足ろハ彩藁の尻切を穿。身丈矮く
面を板く。眼ハ圓ろく。木兎のごと。鼻ハ横く招栂よ似ろ立この
ろぞと生ろよ鶴岡神よ洗井のほとりよ立く。放亀を賛助に法楽とする
横くまか原の凡九郎と呼ろ悪棍ろり。件の凡九郎ろの日も暇の
両個の簡よ艱ひ求ハ索ろろく医の鳥栖木よ括ち付終日八幡の社
よありて眠しろ。ろは貴形をとろを初してろ擔ひ家路をさして急ろり




風九郎
西行
金の猫

ゐ。そのとき童ハ風九郎をえうり〳〵阿爺よ〳〵ふハ常よりも遅かりし。
ゐるともよとゝく。なびらひめひねる欺とハ〳〵風九郎ハ点ゐる汝ハ何ゐ
るぞかゝ。ひとり遠くハなれぞ。鶴岡の流離馬ゑんとゝくゐ送りてゐ
さセんよ。ゐれともよまゐることハみよ童教びて後よりゐよ立て約束ふ
風九郎大ハみつゝ。汝ハ鷲よ行儒よりゐゑぬ物を貰ひゐりゐれ潔よゐれを
ゐえくゐと苦くゐゐふりゐその猫ゑせよ。とハふよ童ハ改をゐち掠ゐハみ
れハ四才よ貰ゐ〳〵たる。亀と摸ゐゐれぞいと憐〳〵いゐゞ慢よゑゐト
のゐと気をでゝむよ風九郎答笑ゐる忌〳〵ものを何よゐせん憐むべ
し。汝その猫をおゐよりそゆゐゞ立ゐ汝ハ罰を蒙りて娶ゐぞハよも侍〳〵。
命をゐゐぞいともかくもせゐとハふゐ汝ハ何ゐを縁故
をゐしゆ〳〵ゐゐそがせゞ風九郎ハさねゐ汝ハその猫を挙常の手

物とゐべられど。それハ荏柄天神の香爐ゐり神のいと情ゐあよゆめ
ゐれバとゐく。社僧ゐれを秘めゐく人よゑえぞゐゐゐ
ど神罰ゐそ来ることをおぞ。懲よりそゆゐゞ立ゐ汝ハ何ゐを縁故
ぞ〳〵ゐりそゆゐゐ忽汝よ罰を蒙りてゐゐぞハよも侍〳〵。
ぞ父も母もハゐゐめゐれめゐとゐんも又ゐりゞ汝ハその猫を挙常の手
ゐゐびかハハふ命をゐゐぞいともせゐとゐひも果れよ童ハ忽ち
ふ気を変ゐてゐよりゐる金の猫を撲地と投捨ゐと汝ハゐゐゐゐね
和尚ハ敗北ゐゐ〳〵ゐゐゐ賢ゐる亀をハ失ハふ却ゐゐをゐゞゐゐと
摸ゐゐハふゐとせんとゐく蹉跎〳〵ゐひゐゐ風九郎ゐれゐゐと
悩よ欺び慰めゐゐりゐふ汝ハ身ゐゐも足ゐねび神も免〳〵
欺ハゐゐゐ汝ハそれ汝がゐよその猫を荏柄よりそゆゐ籟よ逃〳〵

べし。もの物体るや。さらさらよわむ犬の糞受けるごとく捨る。猫い糞み
ことも犬をの嫌ひゆふりめをと。とりひつ。忙く捐ろ金の猫を取て
投又いふゆうられ今られを天神よ返し勧解ろうさる。
いふもさらさる父母も又恙あるべし。さわめ。
あらび逢よ神罰を脱れがたしその度い動解とも吹く放しゆ
とめるをいろどとるびよるよ賜結ちくるさらんよ見ちくなれ已。
とさまざまよ賜ろら、貴ぶりる亀のちもちれやうるを一つとり出し
ちくちくび童い目を拭ひつ。件の亀を車やる押戴れ阿爺ふよ。ふれ
勧解しくゆるまうる。神の憎ゆしく疾の中よとりも祝しゆんう
とらくび泌ちくくいく悲しうまれ物祝るろ良よ且くも喜しくろる
喚しさまとまは吸のびく。泣も止ざれば風九郎いろう笑ひを悪び。

吁。泣い怜悧童ら人よぶ諾ろびぬ。ろくびぬ。ろくびぬ。
ろの処みく逢ぶ可惜命を失しく。父よも母よもいくたくの悲しを
をさとべりし。死しる童いるるろうぞもく。彼塞の河原とりみをちどと
や。十才ろり以下の椎ちび拾み小石の罪ありを一重積ちい父のろ。二
重積ちい母のろ二重積ちい自のろと積も果めよぶろし死鬼の
答よお崩され積れば積とちくく打罵られ地蔵菩薩の袖のわふをへ
餓ちども隠れぬ罪障染波ちく親のいろる聴を未のぼりちる飯ひ
ちく。鉢の山へ追ひあげられ氷獄、ちし報ちく。餓鬼道の苦艱を稟科ちれ犬を豺しろ畜生道
ちし報ちく。餓鬼道の苦艱を稟科ちれ犬を豺しろ畜生道
堕るとうや。ゐしくいく咲ぬ花ろも。枕団ちよろねい焼仟ちろ
そろしれ黄泉の猿へめとちろいこの猫のねのやみも人よなろう

ちそと猫捉声よりも恐されし童ハひろく涙をそ
ぼしぬ。汝沈悲しれるをばしりつゝ友どちの勢計を皆り
毎日よ灸を灼らるゝとも。ひとの
もとうれハ風九郎ハをそろくく川辺へ行
ちれゝとゝび仔細よばゞどろ
ろる亀の項より箱める齢の万代を経ゝ拾ゝ風九郎をゐ
拝こ茶路を投ゝ走去ル収。
そつゝ冷笑ひさそもうそれ童ろる。捨賣ゝても二三百余の價物へ
あるべゝそゞ拝謁とゝらあれて。懐よりとり出る猫ハ海ろり出る三五
の月ともか輝く紫磨黄金とろえひうえゝ莞爾とゝ。ひろ兵衛かゝ
ひぶ提燈の初啓ゝく。もんとする後をろ提索をそゝとり閉め

ろり風九郎驚ろうてこそろ誰とそえゝ生ぶられもろぶ里近く住ハ農夫
何がゞゐよ峨々を鼻とぼゝ。十六才の大童あゝ化ゐよ羊ろり長ゝ
只管よ酒を好こ彼此ゝゝ物あゝびとゝ名ゝろる溢者ありるされど
風九郎もゝぼえある癖者なれバ驚ぐる気色もなく叮ゝとろ笑ひ
ろハ誰ろろんとゝひつゝよ。餓鬼大将の頑ゝを鼻祭礼の神酒よ喫
醉ひこそみたのゝゝろ正ろをな。ちそゝとゐゝ頑ゝを鼻もゝ叮ゝと
冷ゝ咲ひこれハ絶ゝ酒を喫ゝそゝ。
ろハ若宮小路ろり逃を跟ゝ。彼も色もろゝそろり。世ひとりみろゝこと
ゝちんやその猫ろゝとゐひもあゝびゝ
それろゝ逃てろ一大ろようゝろ猫をとろんとそ言葉よおろの頭
喫せんとの化ってゝ撻篦を撻とろちゐ臆ゝ杓を撥取ゝゝ

風九郎

金の蛙
戦々太郎

丁と薙んと
え
組ぶりされば夜の鶴岡もものよあらで悪捉の慾この慾ひと一生つきへ
一の鳥栖の浪打際よおとろくと組でられ蝴蝶よ狂ふ猫蛇のごと
そひ浅い棄ひろ棄まろ。果い吹髪をとりあつて捻挫んと挑み絡みも
ろとも轆々足路の木槿の掛稲ようふさと突出を朴刀よ見破胸
を骨つくぬれ苦と叫ぶ声ともよ鮮血さと濆り忽地全身の肉
丸鼠。嚙こを鼠も臥累を砌を砌ぐ死でり時よ掛稲の間ひさ
ろそろく血刀引提ろろる壮佼賢布の衫衣よ菖蒲法の吹ろる箭
黄木綿の袴高く指揚蒸鞘の長紅両刀を帯よりまぶ羊皮を
顕ーろく雄よ唯よをえろり除くくあを知ろく頬ろありせーよ掛
を掻とりつ。身の血を拭ひきやろう韃つあろくく風丸帝の屍

のほとりろる金の猫を取ろくくえつ押戴紅時ろるる。ろぶ乳
の重器ろろぶーろく猿ろの神明いろぐ掃のろど今ようろの猫をれ
ろ我高が妖鼠の術を破らぶその首をけんも又遠ろべあるる喜ー。
とひとり言ーろく懐よ禁足と挟袖うち拂ふろく去んとする前より
張ふ人ありろくめく前を立塞ぐろ。
まるよろろも又人ありろく。その白くへ去んとをれども去ぶろく。左へ去んとすれども去ぶろ
る蒼海ようろく後ハ薮澤ありとろ。
ふよろろび佶と面をあつつ大
のよ主従よを抗ろく音よせを光実ハ前より仰
とろとえろり改重とろのざりろ共よ。

二兎を殺して金猫に志へる

第十一套　頼朝の智麻衣の歌を解　嫩玉の勇唐糸が逆を鄂

この夜頼朝卿小重忠の内室嫩玉と鞍の女房を集合唐糸よ琴を彈し。政子大姫とも小月を瞻る。秋情を慰めよ景よ西行法師のひとりごと。よゐくむよりあはれなる。彼の琴のこゑを考めよぴそぐそのうへを暁るころ盃の数もわさ奥そく酣なる比。厠へ登んとて。唐糸そのそば気色をうたらん。後方よ従ひくく。臙奩の匜よ銀の水注みをとり添扇子を続そく。外面よ待居らり。そのとき頼朝ハ厠よありてなわ彼ふをとらびく吟ーうへつ。忽地暁るみやうへ左よも右うもとうと』とり上の句ハ囮字のくの字ニッを。左右よりて中へ（の字をかれい水とり字よるる歌。小の句よ。ふくろをとよ木曽の麻衣とある。この麻衣の衣よ上の句のよれバ又の由とり字を加へく。袖とりまるるんのとよくし糸ハ唐糸よ非ず木曽の麻衣とん。彼唐糸とそ。木曽つ残黨な迷るのりと審よ没めへおしも。漏刻遙よ響くるの刻丁亜このれ水を進らするとき。密よ袖を縦しく。られを避とりぬ。されバこそとそく。ゆをそく袖を抜出てりふ。今ハ約のとき遣む。そまとり細と。氷るを懐劾を怯を残し。さるね容よそ厠を立。とく水汲そく。と宣すれハ唐糸つとまりくし。水を進らするありし。傷り頼朝卿の右の袖妾ハ石田為久が従者るらめく。

よわいろく。一人當千と呼れたる。今井四郎兼平が妹なり。塚右京亮
盛が妻なり。君の仇兄夫の仇まさしく此をるれば。一方ならず恨こそあれ。
やとこたく。為久を計策もて。給事しくる。時未つく。今暫
しまし〳〵忍尺〳〵。これが縦脱んとしもあらば。
さらばなん首をあらうそん。といひも果ず。刀を閃して胸前を刺んと
する。頼朝ハ。ずよす。矢を帯ぬはざりしが。女なれども倘猛くも
しく。横さまに三間ばかり。冬蝉の飛ぶが如く。ひらり飛退のみよ。豫て従
へたる袖のもれがさうそと。引離るゝ。いろ〳〵よ唐糸がありより。主の擒
千のひよ五ぬひつ。唐糸ハ。一カ所を。ひつうけて。
追蒐くる。ものもまうんとするを。頼朝。佶と。
あれや。挂へ。と呼りあるよ。後聽るれば。武士一人も。ゐらど。嬶るハ常
ならど。鎌倉殿の人を呼ぬふ声。ゐと慌〳〵たを。洩ぬく。つと身を起
し。長押よりひらる薙刀を掻とり。女房達。続ぬく。とひらりて。驀直
小走。桑ぬ。廿餘人の女房ども。それ後ぬと。群ゐて。日今頼
朝卿を追蒐まり。廊を二ゐび三ゐび。走ぬ。
とり圍ぬ。あの〳〵短刀を。離ぬらじ。生捕らんとく。聞ぬ唐糸
大よ。焦燥く。星眼を睜ぬ。朱の唇をひらべし。長ぬる黒髪をふり
乱〳〵つ。あの〳〵。といひもあへく。西に打てゐる東よ當ぬ。北を靡〳〵て
南を挂。四角八面。縦横ぬ礙よ。挑を戦ふ。その疾こと電光のごとくなり。
又陽ぬの玉昇るよ異ぬらじ。雄くしき勇婦の刀尖よ。黠の女房當
るべくもあらず。動もすれば。駈ぬ靡され。踣ぬらと裳ハ。脛さへあらはに。
ぬ。山風よ吹ぬろさる〳〵まちの光。空よをれぬ白雪の

頼朝を撃んとを

旬より性する。政子大姫の殊さうよう
る。前後の扶戸を揃よ〳〵く。勝負
半晌ぞりまく。主客ともよ大よ疲労也。又よ發とうく
一息吻くえしうる。油斷をえく嫩まい薙刀を水車の如く
うちふり。唐糸やうに。とめけんとするを。懐劍りく掃ひ除つゐら
んと競くまび。嫩まい二足三足退たつ。薙刀を棄利と捨やと声を
うけく唐糸が懐劍を丁と打落しを突倒し。押て索
をかけしりる。唐糸猛〳〵とりくども。その身疾石よあらざれば。
初度の戦のよ脱も撓ふく。嫩まい勢竭て生拘らく
とりくども。なほ頻よ罵ることく已ど。今宵りく嫩まいなるりちび。
急るべたよ。さをば重忠が妻より。政

子大姫いさつく。頼朝卿ふく賞嘆〳〵めひけり。浩処よ鉄いく車
忠ふり来く。鎌倉殿よ義高のち
ち鼻がるを伺えめび曩よ西行
間光隆卿の家藏るがのめる年如此
を木曽義仲よ贈ま。家臣竹川四忠
の性猫を忌嫌ふをりて。こをを召田為久よ與ふをを木曽殿洛
陽落の日。義久ハ御方の陣よ馳加ま。猫をハ分捕ちとうしく
〳〵らく。鎌倉へ進らをたりく。又西行法師ハ。を慈の素門
るるがゆえよ。金の猫をめるとらくとも。愛惜のころ多ぐりく
く。御所を狙くもるく。賤のち
徒童を嫌〳〵く。件の猫を掠とり。遂よ嗾ち南とりく溢者ハ

ろう迯てく。これを聞ふおーb。猫間光実恋地よ二人の悪根を設
ドく。猫股輒くこう復しっこの光実とのる人の。猫間光隆卿の
舎弟なるが。妾腹なれば。その比冠をもゆるさ。卒人まく。豹を
ぬれる見るり。光実復讎言の志切なるりとくb。芙仲栗津管
まく。紂死ありーく。風志を遂るよ由ま。ようくそのて義高な
まとも駭よく。亡兄の冤魂我慰ざやとくく。この両三年が間。間諜の
徳行者よ打扮。ろくぐも栗津が一偽よく。芙高よ撞見ーが義高
妖氣の彫我ろれべ。立比よ本意を遂るよなどど。近曽縁倉
小まりく。童忠を憑ろうまく黙止めくみえ。潜よ扶持ー
く。假よ家隷ろ。毎日ろれをおくく。谷七郷を徘徊ー。ろうろ
芙高の在処を探索るとのへどb。怪なる證迹をいどをまく

俄々ろく旅ろうさぐまーが。今日両行の言ふろく。面あう徒
人この比よ立ものぶをろれまろれども。隠形不測の妖術あるべ。
且くられを放ー。その妖術我破まく後一挙しく擒捕べう思ー
量ろくひと彼是ろうもるくゆえあり。ろく徳よ光実由井が
濱まく。ゆうび芙高を殺漏らーたる乃体を迹。さそもう。
件の金の猫い猫妖を折くの奇特あり。願くい猫股その舊ふ復之
ーく光実よあり。彼人の宿志を果さーぬう。と密まよ十六
まぞ頼朝ろよ殺ろれ。さそい芙高の手死を。不思我のタ術を
ろくろる。宴よ両行の先見賞まる
い兼平が妹。光盛が妻まーく。軟
ろるよ辺の妻。嫉なが比類る死働よろく。輒くられを謁ね

ゆさそこ

ゆさそこ嫩子ゆえ
こ
の侍児を
つくづく
唐糸を
いけ
生拘

とぞのふ。そろそろよ今。その君臣の言と彩ひをつくるよ。ぱーみ。ぱぱぐ。
うゝ木曽殿武威よ轡を。天気を犯せの罪をはゝのふそも。笑
君よ何の科もあらとぞ。さろ伐鎌倉殿忽地よ壻聞カの我ら
ぱくく。その根をこ断。その葉ぱ枯さんとーぬゝ。徴量甚ばーじ
これをーも練ぢぞゝ。ぱをもろそ良臣とゝろん。その愚ろる
る。石田よ務ぬり。めくゝをを憎ーとあぐそぐ。とりくー首ぱ初めく。
ろが身。女ろるれど。恩のろよ。ぬんゝ幸の面目を。と回答そ。そ
の後ゝ向ども終よりのゝろぞ。重忠これをはろく。且感じ。且嘆じや
ぐく縁由をゆえめぐるよ。頼朝ろぐー洗吟ーろ。ぬのゝう。唐
糸女流ありとゝぞも。その忠奪ふべろぐ。これその忠義小愛て。
立池よ殺ろよ忍びぞ。便宜の池よ。土窄を後埋ろく。巌ーく禁

獄いろとぞーとぞ仰ろる。めくろく鶏明暁伐告る比ぬよ猫間光實
榛澤六郎ハ。ろぐゝふゆりまろ
貴よ石田が宿処へ立向ひろゆよ。門戸伐引うたる儘よろく。裡よろ
人もの。るの為体ぞ怪ーぬ。その往方をろぬよ向よ。皆荅ろく
ろぐ。石田がおよ門のあり。ぬのまとも。そろそ。ぱえぐ。呂唐糸い
二字とぞゝ脱ぬをおろぐーとゝふ
ゆぬ。さろい彼人罪の脱がられをろろく。逐電そろるりのゝ。
とりふりろくるのほ為久伐追留んとするよ時い遠よ後ぬ且その
往方をろぐぞるの為体怪ーられば。ぐぬ走りゆりろくいと演説
を。重忠これをゆろく眉伐高ぜ忽地膝伐指ろくりみう。石田を当

乎（やう）と義高の妖術あらん狡（ずる）為久（ためひさ）い彼人（あのひと）のみよ父（ぢゝ）の仇（あだ）ぞ。義高奇術（きじゆつ）あればぞ〳〵唐糸（からいと）がうまをもろ〳〵その罪（つみ）為久（ためひさ）を係累（けいるい）して為久（ためひさ）主従（しゆうじう）を絶（たや）さんこと陥（おとし）為久（ためひさ）主従（しゆうじう）を絶（たや）さんこと。しかばらく猶（なほ）予（よ）首（こうべ）刎（はね）らるゝもあらんと。聴察（ちやうさつ）世（よ）に勝（すぐ）るゝ狡猾（こうくわつ）。処（ところ）を寝（ねむ）さんこそ。重忠（しげただ）い為久（ためひさ）をはえあげ〳〵終（つい）に唐糸（からいと）が獄屋（ごくおく）をいそがしく。いと厳重（げんぢう）に造（つく）り建（たて）其（その）外（ほか）に頼朝（よりとも）卿（きやう）さもこそと忘（わす）れ給（たま）ふ。日夜（にちや）厳（きび）しく守（まも）らせ給（たま）ふ。

主従（しゆうじう）が首（こうべ）今夜（こんや）地上（ちじやう）に落（おち）ん。猫間光実（ねこまみつざね）も縉紳（しんしん）六条（ろくでう）も重忠（しげただ）の為久（ためひさ）を追（おひ）ぞともあれう。と云（いふ）ふ。

谷（やつ）の南（みなみ）よ。その蹟（あと）迹（とゞ）ふ。内（うち）よ石塔（せきとう）数（かず）多（おほ）あり。鎌倉志（かまくらし）よ相伝（あひつた）ふ。唐糸（からいと）が母（はゝ）の墳（つか）と云（いふ）ふ。一説（いつせつ）に光盛（みつもり）が妻（つま）とこゝに来（きた）り詐（いつわ）りて頼朝（よりとも）よ仕（つか）へ居（を）るう。木曽義仲（きそよしなか）のかの軟弱（なんじやく）を殺（ころ）さんとて。腋指（わきざし）を懐中（くわいちう）よ隠置（かくしおき）たり。遂（つい）よ露（あら）はるゝ。その生（いき）の籠（かご）よ入置（いれおき）まゐるとぞ。東御門（ひがしごもん）の山（やま）の上（うへ）よも唐糸（からいと）が土（つち）の籠（かご）とのふ処（ところ）あり。されども非（ひ）なりといふ」以上。今按（いまあんず）るよ。唐糸（からいと）がうの東鑑（あづまかゞみ）盛衰記（せいすいき）の説（せつ）区（まち）〳〵にて詮（せん）なき記（しる）し載（の）せざれ。只（ただ）に碑（ひ）より伝（つた）ふるのみ。

らざれ。女院（にようゐん）の刺客（しかく）い私漢（しかん）より罕（まれ）なり。頼朝卿（よりとものきやう）の義高（よしたか）の在処（ありか）を索（もと）めずるよ。唐糸（からいと）大事（だいじ）を為損（しそん）じつ。縁坐（えんざ）を要（もと）ずるよ。唐糸（からいと）等閑（なほざり）なるざる筈（はず）なるう。義高（よしたか）ふたゝび深（ふか）く躲（かく）るう。佛（ほとけ）を動（うごか）すべきなれば。平家（へいけ）の残黨（ざんたう）ぞ。義高（よしたか）よ非（あら）ず。従（したが）ひ大（おほ）

ろくろく呉ひもとうれつもの。歌俗よ
く。京都の守護時政と心ゆあひて。禁闕を守ゆべく又猫間光実が
おいらくい孫倉よ残くありけり。密山平よ義高を索さとべし。ようく件
の金の猫い彼人よ返くよめべきよしもとしゆくと仰するよ
ど重忠承く宿所よ退り。俸の越状光実よゆうえもとに。懇須よ行
装を整く。内室嫩子と。今茲三才よなりり。嫡男童稚をおろく。
縁隈六郎以下の家隷数百よ従へ。八月下旬よ首途しろく。京顧
よ路をらそぐ。日数十日あまりよして京着し。源廷尉の旧の
迹。堀河の宿所よ入る。北條時政京都よりよ孫倉殿の仰状へ。
ろくろく禁闕を守護くまゐらすべくと許よ云ふの巻とぐく。楔子あり。ろく前よ辞するが如し。頼朝鶴岡

詣を楔子とと。頼朝西行を楔とと。西行金猫
ゆと金猫を楔とと。金猫邸童及風九郎。峨くを郎を出生風九
郎峨くを郎を楔とと。風九郎峨くを郎。猫間光実を出てその粋
を本よ復ふれ。又楔り。又文武の許論を楔とと。文武許論景能重忠
を出と。重忠を楔とと。重忠西行を楔とと。西行金猫
を出と。重忠を楔とと。唐糸嫩子を出と。唐糸
咏秋芙蓉を楔とと。唐糸嫩子を出と。奇
楔り。古人云楔ふい冬中の有生ふ。憑空の詞り。今按ずるか。
楔ふい蓮を砍ろよ。蘭中の糸。その砍ろ蹟て蜀ざるが如し。又蜀性
墨氏よ十二因縁の説あり。亦是浮屠家の楔子り
或人向頼朝の西行よ贈るの銀の猫り。ろくろくを今金猫
とろいろよそや。答てのふ。金ついその色黄よてその性よ

金ありといへ。彼猫をぬめ土中より出るよろし。且金ハ秋気殺戮の主なり。光実これを得ざる宜し。又金冤猫王の児載一ら捜神記よりも金冤ハ和よの三もあり。猫ハその形虎よ似ること。その毛黄色に帯るものを佳とす。故ゆえハ金の猫とする故。他有の用ひべからざるの如くするなり。今悉く評すること能ハず。

附ろくの書八巻を全本とす。今第一巻より第五巻まで。厘ら前編とす。続梓既よ落成よ。六巻より以下大尾まで至ること。ゆえ作者の肚裏よあらら分娩よ未春うるらどその稿未を乞得ら。続ら全璧とすべし。○以上。作者ぶろくろいふ。この書第二巻と。第六第七第八巻をぬる意とをうることをへ。この編中得意の作文寡し。閲者をしら遺憾多からむ。ようて今その次ようとうをあらく。後編三巻の大意ハ附録と。

第六巻　後編の上冊となり

大意

絹峰よ戈高。石田為之を撃ふ。渡月橋辺雑主従困居の話。竹川正忠夫婦。忠戈の段半ばく終る。閲者後ハ

第七巻　後編の中冊となり

大意

正忠が妻華戸。恩の中途。正忠幻主を懐その子をらばしてそ主をうる話。

第八巻　後編下冊となり

大意

大姫ぬう戈高を追慕ふ。宮中よ跋扈し。唐を破り。忍の究を雪ぐ。大姫節よ死し。光実金の猫を以妖

頼豪阿闍梨怪鼠傳巻之五終

賴豪阿闍梨惟鼠傳引用群書要語 雅窓

貓 本草綱目 巻五十一 獸部 時珍曰。貓、苗茅二音。其名自呼。陸佃云。鼠害苗而貓捕之故字從苗禮記所謂迎貓爲其食田鼠也。亦通格古論云。一名、蒙圖。或謂、家貍。即貓非矣。或云。貓有病。以烏藥水灌之良。世傳薄荷醉貓。死貓引竹物類相感然耳。○〔今按〕我俗傳貓疫以銅屑雜魚肉餌之必愈。近曾試之似有切。然藥餌遲則亦竟不活

酉陽雜俎後集 巻八 段成式云。貓目晴募圓。及午豎斂如綖。其鼻端常冷。唯夏至一日煖。其毛不容蚤虱。黑者闇中逆循其毛。即若火星。俗言貓洗面過耳則客至。楚州謝陽出貓。有褐花者。靈武紅叱撥及青驄色。昔貓一名、蒙貴。一名、烏員。平陵城古譚國也。城中有一貓。常帶金鎖。有錢飛若蛺蝶。土人往往見之。

猫精 〔朱翼〕 貓晴辨十二時子爲時先故貓食鼠

納猫 〔俞宗本納貓法〕 凡買貓用斗捕等物以袋盛之。勿令入見至家計筋一根。和貓置於桶內盛之。每過水溝飲處。將石置之。使不過家。從吉方歸取貓出。拜堂竈犬畢。將貓筋挿于土堆上。使勿令走出爲法也。

和訓 〔和名類聚鈔〕 貓、和名祢古萬。似虎而小。能捕鼠爲狼。

〔契沖雜記〕 猫ねこ 祢子 待の略欤。鼠の類よつらねことりあれバねことめでゝ待とつけらるゝ欤。〔真淵頭書云〕猫ハよろづ心ばへ。そらぬものうつくしくて猫の性ハ。鼠みるゝも鳥みるゝも先ねこと睡獣の略うるべし。けもの。けの字。交こ。我人。苗の字ハ。

けりのとらのいつゝ 今按 或説ふ あごそろぬ を猫とゝ 枕草紙 小夜ふけてのさゝやきなどもきこえぬほどにうちとけてものなどいふほどに猫のおとなくてとかくなれつゝかしがましくするをにくみてにげさせなどするもいとよくとらぶるぞ。

猫産婦 小右記 長保元年九月十九日。内裏御猫産子。女院左大臣右大臣有産養事。有衝重掩飯納筥之衣等。猫乳母馬命婦。時人咲之。奇怪事也。

靈貓 本草綱目獸下云 藏器曰。靈貓生南海山谷。狀如貍。白爲牝。牡。其陰如麝。功亦相似。異物志云。靈猫一體。若雜入麝香中。罕能分別。用之亦如麝焉。〇 今按 香狸。神貍。淨貓。皆靈猫之類。

呼貓 群書摹要 呼貓聲。

山貓 野史 山貓生八丈嶋。形最長大。常栖山中。嵓崖捕鳥爲糧。動入人家。衝去小兒。咬之。

鼠

本草綱目卷五十一 時珍曰。家鼷 即人家常鼠也。以其米豪善穴。故南陽人謂之鼷鼠。其壽最長。故俗稱鼠爲老鼠。其性疑而不果。故曰首鼠。嶺南人食而譏之。謂爲家鼷。鼠字篆文。象其頭齒腹尾之形。

正字通 鼠。賞呂切。音暑。穴蟲。善竊。晝伏夜動。四齒無牙。前爪四。後爪五。尾文如織。無毛。俗稱鼠爲老鼠。易繁。辭良爲鼠。〔雲仙雜志〕山中謂鼠爲社君。又 水鼠 穴水旁岸隙。似鼠而小。食菱芡。鼠鰕文 水鼠 東方朔云 生北荒積氷下。皮毛柔可席。

鼠王鼠母 酉陽雜俎 舊説 鼠王 其溺著口鉄大如水中者。性畏狗溺。一滴成鼠。一説 頭脚似鼠尸。一滴成一鼠。時鼠灾。多起於鼠王。

母ヒヒ所王虎動成萬萬鼠其肉極美凡鼠食死人ノ目睛則
鼠王俗云鼠齧上服有喜齧衣欲得有益無益也

埃 西京雜記卷六 王之未埋者爲璞死鼠未屠者亦爲璞月之日
爲朔車之軨亦謂之朔名齊實異所宜辨也

神 抱朴子 鼠百歲則色白善憑人而卜名曰仲能知一年中吉凶

鼠戲 五雜俎 長安丐者有鼠戲鼠甚馴教者不知何以習之

神鼠 耕餘俗解 捕鼠法蟹ノ中ノ黃ナル物ヲ陰乾ニシ安息香
驚甲芸香ト共ニ和屋ノ中四方ノ壁ノ上下ニテコレヲ焚ベシ鼠自然ト走出テ人ノ前ニ到ル捕テ野外ニ送ルベシ殺シ傷ルコトナク悉除去ルノ良法ナリ

和訓 和名類聚鈔 鼠昌與反和名稱須美〇又鼠一名

秘藏抄 ふえあ。又 ふあのと ともいふ 定頼家集 おえとり

鼠國 述異記 西域有鼠國大者如豹中者如兎小者如常鼠頭悉白商賈經過其地不祈祀則齧人衣物是也

火鼠 正字通 火鼠出西域及南海火州山有野火鼠産干中甚大。
人取其毛績之號火浣布遇汗燒之即潔

烏鼠 事文後集 烏鼠山鼠尾短形如家鼠在內烏在外爲牝牡

田鼠 月令 李春田鼠化爲鴽

〇鼠種類最夥 鼷鼠 郭璞云其大如拳其支如豹 說文云 鼷鼠小鼠也食人及鳥獸雖至盡不痛 和名鈔云 鼷鼠上音奚和名阿末久知祢須美亦有 鼨鼠 和名豆良祢亦有

古。亦右龍頭。和名毛美鉏云俗云無佐佐比。亦有龍鬚。和名以
太知。亦右龍鬚一名。鼠鬚。和名古呂毛。常在土中行若見
三光即死者是矣。今按鼴鼠性畏獾馬音若撓聞掻之則鼴鼠
不壞其根。

文化丁卯仲冬上浣飯岱著作堂主人集録

曲亭馬琴翁
高井蘭山翁

唐本新譯水滸傳全九十冊出來

初編　十冊　自卷之壹　至卷之十

○張天師祈雨瘟病を攘ふ○洪太尉誤て妖魔を走す
○王教頭延安府へ走る　○九紋龍史家村を開き
○史大郎夜華陰縣へ走る　○魯提轄拳て鎮関西を打
○趙員外重て文殊院を修す　○魯智深大て五臺山を開き
○小覇王醉て鎖金帳へ入る　○花和尚大て桃花村を開す
○九紋龍赤松林へ前程を　○魯智深瓦罐寺へ火焼
○花和尚倒て垂楊柳を扳　○豹子頭誤て白虎堂へ入
○林教頭刺されて滄州道へ配る　○花和尚大て野豬林へ開く
○柴進ゞ門へ天下の客を招く　○林冲ゞ棒洪教頭を打
○林教頭風雪山神廟へ　○陸虞候草料場へ火焼

貳編

十冊

自卷之十一
至卷之二十

○朱貴水亭に號箭と施す
○梁山泊より林冲落草ん
○青面獸北京より武と鬪ふ
○赤髮鬼醉て靈官殿より郎
○吳學究三阮と說て撞着せむ
○楊志金銀擔を押送す
○魯智深二龍山と聳す
○宋公明私ふ晁天王と放
○林冲水寨より大ひに悅ん
○梁山泊の義士晁蓋と尊ん
○閻婆醉て唐牛兒と打
○閻婆大に鄆城縣と鬧む
○林冲雪夜梁山より上陽
○汴京城より揚志劍と賣
○急先鋒東郭にて功と爭ふ
○晁天王義と東溪村ふ認む
○公孫勝七星ふ應じ義ふ聚
○吳用生辰綱と智ふ以取
○青面獸宅珠寺と雙奪
○美髯公智ふ以排翅虎と穩寺
○晁蓋梁山ふ泊と奪ふ
○鄆城縣の月夜ふ劉唐ふ走らしむ
○宋江怒て閻婆惜と殺ふ
○朱仝義とめんで宋公明と救ふ

三編

十冊

自卷之一
至卷之二十

○橫海郡に柴進客ふ留む
○景陽岡ふて武松虎と打
○其ノ下
○王婆西門慶ふ計略む
○鄆哥大ふ授官廳と鬧す
○母夜叉孟州道ふ人肉と賣
○武松威安平寨ふ鎭る
○施恩重て孟州道ふ覇ろ
○都監張蒙方武松ふ陷る
○張都監血ふ鴛鴦樓ふ濺
○武行者醉て孔亮ふ打
○宋江夜ふ蓋山ふ看
○武都頭十字坡ふ張青ふ遇
○施恩義ふ以快活林ふ奪ふ打
○武松大ふ飛雲浦ふ鬧す
○武行者夜蜈蚣嶺ふ鬧す
○錦毛虎義ふ以宋江ふ救ふ
○花榮大ふ清風寨ふ鬧す

○鎮三山大ゐ青州道と鬧す　○霹靂火夜叉磯場ゐ走
○石將軍村店ゐ書を寄　○小李廣梁山ゐ雁を射
○梁山泊ゐ呉用戴宗を挙　○揭陽嶺ゐ宋江李俊ゐ逢
○没遮攔及時雨と逍遥　○船火兒夜潯陽江と鬧す
○及時雨神行大保ゐ會す　○黒旋風浪裡白跳と鬪ふ
○尋陽樓ゐて宋江反詩と吟ゼ　○梁山泊戴宗ゐ假信と傳へしむ
○其下　○梁山泊の好漢法場と劫ク
○白龍廟ゐ英雄小ク義ゐ聚　○宋江智とを以て無爲軍を取
自巻之廿一　○張順黄文炳と活捉　○還道村ゐて三巻の天書と受
至巻之卅　○宋公明九天玄女ゐ遇ふ　○假李逵の勇徑單人と劫す
○黒旋風沂嶺ゐて四虎と殺す　○錦豹子小徑ゐて戴宗ゐ逢
○病關索長街ゐて石秀ゐ遇　○揚雄醉て潘巧雲と罵

○石秀智とを以て裴如海と殺
○病關索大ゐ翠屏山と鬧を　○揮命山火とを以て祝家店と焼
○撲天鵰生死の書と雙修ク　○宋公明一たび祝家莊と打
○一丈青單王矮虎と捉　○宋公明兩祝家莊と打
○解珍解宝双て獄と越　○孫立孫新夫ゐ牢と劫ク
○呉学究連環の計と双用　○宋公明三たび祝家莊と打
○挿翅虎拳とを以て秀英と打　○美髯公誤て小衙内と失ふ
○李逵殿天錫と打死ク　○柴進高唐州ゐ伏陥す
○戴宗智とを以て公孫勝と取　○李逵爻竹とを以て羅真人と磨
○入雲龍法と鬪ひて高廉と破　○黒旋風穴と探て柴進ゐ救ふ
○高太尉大ゐ三路の兵と興ク　○呼延灼連環馬と擺布き
○呉用時遷とを以て甲と盗しむ　○湯隆徐寧と賺して山ゐ上しむ

自卷之四十
至卷之五十

六編 十冊

○徐寧教て鈎鎌鎗を使しむ　○宋江大に連環馬を破る
○三山義を聚て青州を打　○衆虎心を同くして水泊を保す
○吳用金鈴吊掛を躁す　○宋江西岳華山を謁す
○公孫勝芒碭山より麾と降る　○晁天王曾頭市を箭に中る
○吳用智をもりて玉麒麟を躁す　○張順夜金沙灘を鬧る
○冷箭を放て燕青王を救ふ　○法場を劫て石秀樓を飛
○宋江が兵北京城を歩　○関勝議して梁山泊を取んとす
○呼延灼夜月関勝を躁す　○宋公明雪天に索超と擒ふ
○托塔天王夢中に聖を顯す　○浪裏白跳水上より寇を報ず
○時遷火をもりて翠雲樓を焼　○吳用智をもりて大名府を取
○宋江馬歩三軍を嘗す　○関勝水火二將を降す
○宋公明夜曾頭市を歩　○盧俊義史文恭を活捉

自卷之五十一
至卷之六十

七編

○東平府を誤て九文龍を陷　○宋公明義をもりて双鎗將を識
○没羽箭飛石を飛せて英雄と打　○宋公明報を棄て壯士を擒
○忠義堂の石碑天文を受　○梁山泊の英雄座次を排す
○柴進花の簪して禁院に入　○李逵元夜に東京を鬧しむ
○黒旋風喬鬼を捉　○梁山泊雙て頭を獻ず
○燮青智をもりて擎天柱と撲　○李逵壽張を喬て衙を坐す
○活閻羅船を倒りて御酒を偷む　○黒旋風部を扯て欽差を罵
○吳加亮四斗五方の旗を布　○宋公明九宮八卦の陣を排
○梁山泊十面の埋伏　○宋公明再童貫に贏
○十節度使議して梁山泊を取る守　○宋公明一高太尉と敗
○劉唐火を放て戰船を焼　○宋公明兩高太尉と敗
○張順鑿て海鰍船を漏しむ　○宋公明三高太尉と敗

十冊

自卷之七十一
至卷之七十

○樊青月夜通君ヲ遇
○梁山泊ヲ金ヲ分テ大ヲ買市ス
○宋公明詔ヲ奉テ大遼ヲ破ル
○宋公明ノ兵薊州城ヲ圍ム
○宋公明夜益津関ヲ度
○宋公明大ヲ獨鹿山ヲ戰ヲ
○宋公明大ヲ幽州ヲ戰ヲ
○顔統軍陳ヲ混天ノ象ヲ列
○戴宗計ヲ定テ蕭讓ヲ賺
○宋公明殿ヲ金ヲ分テ招安ヲ受
○陳橋驛ヲ淚ヲ滴テ小平ヲ斬
○盧俊義大ヲ玉田縣ヲ戰ヲ
○吳学究智ヲ用テ文安縣ヲ取
○盧俊義ガ兵青石峪ヲ陷
○呼延灼力番將ヲ擒ヲ
○宋公明陳ヲ破テ功ヲ成
○宋公明夢ヲ玄女ノ湌ヲ授ル
○宿太尉恩ヲ頒ヲ詔ヲ降ス
○五臺山ヲ宋江參禪ス
○双林鎮ヲ燕青故ヲ遇
○宋公明ノ兵黄河ヲ渡ル
○盧俊義黒夜ヲ敵ヲ破ル
○軍威ヲ振ヒ李廣ノ神箭

八編

十冊

自卷之七十一
至卷之八十

○蓋郡ヲ打智多星ノ計ヲ籌
○宋江兵ヲ兩路ニ分ツ
○李逵ガ暴衆人ヲ陷
○喬道清ノ術宋江ヲ破
○入雲龍ノ兵百谷嶺ヲ圍
○瓊英處女先鋒ト做
○花和尚緣纏井ヲ解脫ス
○張清瓊英双功ヲ建
○墳地ヲ誅テ險逆ヲ產ス
○王慶姦ヲ因テ官司ヲ噬
○張管領呂妻ノ弟ヲ因テ身ヲ喪フ
○喬道清風ヲ同シ賊寇ヲ焼
○李逵夢ヲ天地ヲ鬧ス
○関勝義ヲ用テ三將ヲ降ス
○宋公明ノ忠后土ヲ感ス
○幻魔君ノ術五龍山ヲ窘
○陳瓘諫官安撫ヲ陞
○張清瓊英ヲ配シ且鄔梨ヲ鴆ス
○混江龍水ヲ大原城ヲ灌
○陳瓘宋江同シク捷ヲ奏ス
○春陽ヲ踏テ妖艷奸ヲ生ス
○龔端龔正配軍王慶ヲ師ス
○房山寨ヲ双ノ猶強人ヲ併
○書生談笑シテ強敵ヲ退ク